

■英国 Your Party 内における三つの論争とその背景

2025 年 11 月 19 日

阿部治正

1. 対立構図・論点

ア トランスジェンダー問題

報道によると、Your Party 内で「トランス女性を“女性”と扱うかどうか」「トランス・ライツ(トランスの人権)を「無条件」「例外なし」で支持すべきか」という点で、明確な分裂・論争が生じているようです。

例えば、ザラ・スルタナ氏は「トランスジェンダーの権利は人権です。貴党はこれを守り抜きます。例外も言い訳も許さず、この闘いの妨げを許しません」と明言しており、トランス・フォビア(変性者への差別)を断固否定する立場を打ち出しています。他方、アドナン・フセイン氏が「トランス女性を“生物学的に女性ではない”」という発言をしたとの報道もあり、こちらは「社会的合意を得にくい」「保守的な生物学的性別観を持つ」立場との指摘があります。

このため、派内では「イデオロギー的に明確なトランス支援を掲げるか」「トランス問題について幅広い市民を集めるため慎重に扱うか(あるいは優先度を下げるか)」という戦略論の対立が出ています。

イ イスラム男性の保守性、イスラムフォビア疑念

報道では、アドナン・ハッサン氏らが「ムスリム男性(Muslim men)に対して“暗黙の偏見”、イスラムフォビア的な批判・疑念(例えば「イスラム男性は保守的だ」というステレオタイプ)を党内に感じている」との主張を展開しています。

スルタナ氏側から見れば、例えば「イスラム男性コミュニティでは保守的な性別・家族観が根強い」という疑念をきちんと批判・検証すべきだという立場があり、逆に「その疑念を掲げるとムスリム男性全体をステレオタイプ化、差別化することになる」という反論も出ているようです。

報道によれば、ハッサン氏は「暗黙の偏見」という言葉を用い、党の内部で自身を含むムスリム男性議員・活動家が「見えない偏見」にさらされていると主張しています。

つまり、この論点は「少数・移民系、イスラム系有権者を含む広範な左翼結集を優先するなら、イスラム男性に対する疑念(保守性・家父長制的要素など)を前面に出すべきかどうか」「出さなるとどのように扱うか」という戦略的・理論的な争点を含んでいます。

ウ 議員の発言権尊重か労働者・市民党員のイニシアチブ重視か

報道・公式資料によると、Your Party では「従来政党型の議員中心体制にたいして、草の根・市民参加型・会員の直接民主主義的構造を取るべきだ」という構想が掲げられています。し

かし、実際には設立準備にあたる steering committee(運営委員会)や設立業務の管理運営団体である(Your Party UK Ltd)などに議員あるいは少数の幹部が関与しており、これを「議員・幹部支配的」と批判する声も出ています。特にスルタナ氏は「党が(ワーキング・グループのジェンダー・バランス不足など)“性差別主義少年クラブ”」になっている」との発言をしており、運動内部・会員参加型構造を重視する立場を明確にしています。

反対側(ハッサン氏ら支持派)からは「まずは結集・勝利に向けて議員・組織を動かせる体制・方針を優先すべきだ」という戦略的見方が出ているようです。つまり、「運動的・参加型を重視しつつも、即効的に政策発信・議会化できる体制が必要」という立場です。

このため「党員参加・底辺民主主義を徹底するか」「議員・キャンペーン主導でできるだけ早く政治的成果を出すか」という組織運営・戦略の軸でも対立が出ています。

エ 全体としての戦略論の対立

整理すると、次のような二極(あるいは多軸)戦略対立が浮かび上がっています。

方針A 理論・原則を優先。たとえば「トランス権利を何より優先」「イスラムフォビアへの徹底的な批判」「議員だけでなく市民・党員の主導を重視」

方針B 結集・拡大を優先。たとえば「トランス問題は広げづらい。まずは広範な反貧困・反格差・反戦を訴えて大衆を集める」「イスラム男性コミュニティを含めた集団を動員するには保守的視点のある程度許容・棚上げすべき」「まずは議員・組織主導で立ち上げを急ぐ」

各議員・グループがどちらのラインを重視するかで、同党内で緊張が生まれています。

特に「トランス権利」「イスラム男性コミュニティとの関係」「党内民主主義モデル」という三つの軸が交錯して、単純な「左 vs 右」の対立ではなく、「左翼内部での価値優先順位」の対立になっていると言えます。

2. 背景・状況整理

この対立が表面化してきた背景と、現状のいくつかの重要なポイントを整理します。

Your Party(仮称)は、2025 年9月末に登録された左派新党で、設立準備が進んでおり、創設会議を 11 月末(29～30 日)に控えています。

設立以前から、左派インディペンデント(非党所属)議員たちが集まり「集合的な左翼政党・運動型政党」をめざす動きがあり、そこにざら・スルタナ氏、アドナン・ハッサン氏、アユブ・カーン氏らも名を連ねています。

ただし、設立にあたっての運営会社・会員募集・財務スキームなど運営上の混乱・疑問が報じられています。たとえば、スルタナ氏が独自に会員募集ポータルを立ち上げ、他の議員陣営との間で「無許可のメール・直接引き落とし・法的助言を要する可能性」といったトラブルが生じたという報道があります。

トランス問題については、報道タイトルにも「Your Party にとって存在基盤を揺るがすトランス権利をめぐる争い）」というものがあります。

イスラムフォビア・イスラム男性疑念の問題も、ハッサン氏が「ムスリム男性に対する隠れた偏見がある」と主張して離脱に至った、という報道があります。

現状としては、議員側（少数）と、党员・会員・運動家側（草の根）という二重構造の力関係も揺れており、「運動型政党」をめざすか「議会型政党」をめざすかの軸も対立を複雑化させています。

背景として重要なのは、以下の点です：

ムスリム有権者・イスラム系コミュニティが、2024～25 年頃のパレスチナ情勢・英国左派政党のイスラムフォビア問題を背景として、左派政党内での「排除されている」と感じる声が出ており（たとえば「左派でもムスリム男性・イスラム系の人間が安心して参画できるのか」）という問いが立っています。

また、トランス・ライツ問題は、特に英国の労働党・左派政党系で「トランス包括派」と「性別厳格・ジェンダー批判派」との対立が顕著になっており、左翼がどうこの内部分裂を整理するかが試されている段階です。

「合意を得にくいテーマ（＝トランス、イスラム男性保守性など）は敢えて棚上げして、より幅広い人々を結集すべし」という実務的戦略を取る議員・運動家も多く、これに対して「原理・価値を妥協すべきでない」「排外主義・イスラムフォビア・トランスフォビアに対して断固たる姿勢を」という価値優先派が反発しているという構図があります。

なお、議員・運動家が多数の市民・党员をどう巻き込むか、また初期段階の党運営体制（財務、意思決定、参加型民主主義）をどう設計するかという点でも「議員支配型」か「構成員参加型」かの葛藤が出ています。

3. Jeremy Corbyn 氏の態度

では、ジェレミー・コービン氏（旧・英国労働党党首）について、この新党プロジェクトにおける彼の見解・態度を整理します。

コービン氏は新党「Your Party（仮称）」の登録時に「Leader（代表）」として登記されており、9月30日に同党が登録された際には、コービン氏が党首として記載されています。

ただし、彼自身は「新しい政党を立ち上げるのは良いが、すぐに階層的なリーダー制・支配構造を取るのは危険だ」「(まず)集まること・運動から始めるべきだ」という発言をしており、いわば「議員トップ主導よりも市民運動型」の方向を志向しているという報道があります。

例えば、『ザ・ガーディアン』の報道によれば、スルタナ氏が7月3日に労働党を離党し新党を共に立ち上げると表明した際、コービン氏は「討議中だ」「私は(この時点で)リーダーになるつもりではない」と慎重なコメントを出しています。

ただし、報道ではコービンサイドは「トランス問題については限定的な発言」ととどまっており、スルタナ氏が「トランス権利を断固擁護する」と表明したのに対し、コービン氏は「この党ではトランス差別を許さない」「そうした価値を支持する」と明言はしたものの、具体的な「無条件かつ例外なし」の姿勢を目立つ形では打ち出していないと報じられています。

また、「イスラム男性・ムスリム男性コミュニティ」への疑念・偏見をめぐる論争についても、コービン氏自身が公に「ムスリム男性に対する偏見がある」というハッサン氏の主張を明確に批判した、という報道は今のところ見当たりません。他方で、ハッサン氏が離脱を表明した際、「深刻な内部抗争」を理由にあげ、コービン氏のプロジェクトへの信頼を取り返すための対応が報じられています。

総じて言えば、コービン氏は「この新党を市民・草の根から構築すべき」という理想を掲げつつも、実際の内部論争(トランス・イスラムフォビア・運営構造)については一定距離を置くか、あるいはどちらの派にも明確な支援を打ち出していない、というのが有力な見方です。

4. まとめ・論点整理

Your Party 内の対立構図(イスラム男性保守性疑念・トランス差別反対・議員 vs 市民参加)・について、次のように整理できます:

報道上も Your Party 内ではトランス権利をめぐる明確な分裂・対立が確認されています。スルタナ氏の「無条件トランス支援」vs ハッサン氏らの「生物学的性別観重視」的な発言。

ムスリム男性コミュニティに対する党内外の疑念・偏見という論点も浮上しています。ハッサン氏が「ムスリム男性に対する暗黙の偏見がある」と主張し、離脱を表明しています。

運動・草の根参加重視か議員主導かという組織・戦略の対立も、設立準備段階から報じられており、スルタナ氏側から「性差別の少年クラブ(sexist boys' club)」発言が出るなど、党员・市民をどう巻き込むかの構造的な争点です。

コービン氏については、「ある程度ニュートラル・中立的な立場を取っている」が、内部でどちら側を暗黙に支持しているかは明確に報じられていません。彼は「市民参加型」を理想としつつも、現実の運営では議員・幹部が関わる体制を採っており、それが論争の一因ともなっています。

5. 阿部の私的見解

「構造的批判」「排外主義」「真の階級的立場」「運動-政党関係」などの視点から、この Your Party の論点を少し拡張して考えてみると、次のような観点も見えてきます。

トランス権利やイスラム男性保守性というテーマは、単なる「アイデンティティ」問題ではなく、階級・民族・ジェンダー・セクシュアリティという複数の軸が交錯する場です。特に、イスラム男性というマイノリティ・ニュー右派的ステレオタイプのなかで「保守的家父長制的な男性像」が想定されやすいという点で、左翼運動のなかに「少数派男性をどう位置付けるか」「その男性主体性をどう解体しつつも尊重するか」という構造的挑戦があります。

また、トランス・ライツをめぐる争点は、左翼運動内部で「ジェンダー・性的少数者の権利拡大」と「大衆結集(特に労働者・マイノリティ男性を含めた)」の緊張をはらんでおり、「部分運動の優先順位」と「統合的階級運動・反格差運動」の関係が問われています。ここで重要なのは、例えばトランス問題に引きつけて考えれば、私が良く言う「労働者市民の心と体を資本の支配・コントロールから奪い返す闘い」、その意味での「階級的観点」です。この観点は、移民・マイノリティ問題についても言えることです。

「議員中心か市民参加か」という組織論の問も、「労働者・市民がイニシアチブを持つ」という視点と合致します。つまり、政党というフォーマットを通じて「運動」を捉えるならば、どこまで「トップダウン・代表制」で民主主義を設計するか、またその過程で「議員というエリートと市民という実践者」のギャップをどう埋めるかが鍵です。Your Party の事例は、運動から政党化を試みる際の典型的な「立ち上げ期のズレ」を示していると言えます。

「排外主義・階級的排除」から見ると、ムスリム男性をめぐる論争・トランス・ライツの論争はいずれも、「内部・外部」「主流・周縁」「包摂・排除」という軸をもっており、左翼新党がそのあたりをどう整理できるかが運命を左右すると思われます。

最後に、脱成長や代替社会構想の議論と接続させるならば、経済・社会モデルだけでなく「ジェンダー・人種・セクシュアリティの交差性」を視野に入れた構想を掲げる際、このような内部論争をクリアにできるかどうか「新しい左翼政党が社会的弱者・マイノリティを真に包括できるか」という試金石となるでしょう。